

ひょうご
—神と伝—
伝説紀行

男神と女神の山造り
よく似た山はどちらが高い

伝説

男神と女神の山造り
感謝がつなく神様と里

紀行

神の坐す山と神出の里
・たおやかな神様の山
・雌岡山と古代の信仰
・裸石さんと姫石さん
・雄岡山
・印南野と土器作り
・北条時頼と最明寺

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

男神と女神の山造り よく似た山はどちらが高い

神戸市西区に雄岡山（おっこさん）と雌岡山（めっこさん）という、美しい山があります。高さも形も、とてもよく似た二つの山は、古くから「神様の山」として人々に大切にされてきました。二つの山は遠くからもよく見えて、道行く人々の目印にもなります。

こんなによく似た二つの山が、どうやってできたのでしょうか。それにはこんなお話が伝わっています。



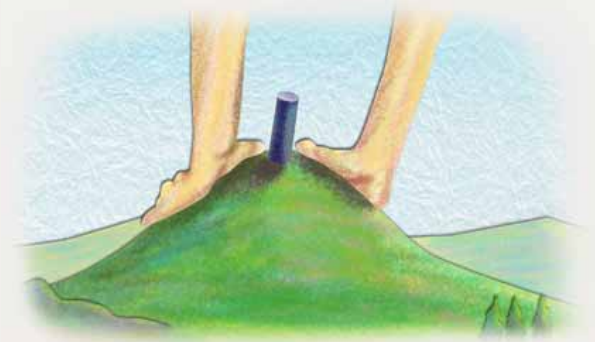
はるかな昔、このあたりに男の神様と女の神様がいました。毎日、何ごともなく静かにくらしでしたが、どうにもたいくつでなりません。ある日、男神はこんなことを思いつきました。

「二人で山をつかって、高さ比べをしてみないか」

「それはおもしろそうね」

二人はさっそく、山のしんになる大きな鉄の棒を用意しました。大地に鉄棒をつき立てて、そのまわりに土を盛り上げるのです。

二人の神様は、鉄棒のまわりにせっせと土を盛り上げてゆきました。盛り上げるたびに、美しい山の形ができあがってきます。二人とも、同じように土を盛り上げてゆくので、なかなか勝負はつきそうにありませんでした。



その時です。「ボキッ」というものすごい音がひびきました。男神の山の心棒が、まん中からおれてしまったのです。大きな鉄の棒はごろごろと転がり、地ひびきをたててふもとに落ちました。これではもう、土を盛り上げるできません。

「勝負は私の勝ちね」

女神はにっこりしながらそう言うと、最後まで土を盛り上げて、山をつくりおわりました。雌岡山の方が高く大きいのは、こんなわけがあったのです。

男神がおれた鉄の棒を拾い上げてみると、山のふもとには、大きな穴があいてしまっていました。やがて、そこに水がたまって大きな池になったので、人々は「金棒池」と呼ぶようになったということです。



やがて雌岡山には、天から大己貴神（おおなむちのかみ）が下ってきて、ここで百八十一柱の神々を生みました。そういうわけで、このあたりの土地は「神出（かんで）」とよばれているのです。

男神と女神の山造り よく似た山はどちらが高い

おわり

紀行「神の坐す山と神出の里」

たおやかな神様の山



雌岡山（左）と雄岡山（右）

第2神明道路から国道175号線を北上すると、ほどなく道の周囲に田園風景が広がってくる。ずいぶん開発が進んだとはいえ、まだあちこちに残る緑豊かな里山は、東播磨（ひがしはりま）の原風景だろう。やがて道は、その丘陵地帯へと登り、目の前に円錐形の美しい山容が見え始める。それが雌岡山（めっこさん）である。

老の口の交差点で国道とわかれ、東へ道をたどると、1kmばかり進んだところで、左手に神出神社入り口の鳥居が現れる。ここからが、雌岡山を登る道である。

雌岡山には登山道が多い。東西南北いろいろな方向から、5~6本の道が山頂へと続いており、どの道もよく整備されているが車で登れる道は一本だけ。山腹を巻くようにつけられた車道を登ると、間もなく山頂下の駐車場に到着する。入り口の鳥居から1kmちょっと。ふもとから歩いて20分ほどであろうか。

雌岡山と古代の信仰

雌岡山山頂には、神出神社がある。南を向いて建つ社殿の前には、神社の縁起を記した石碑がたてられていて、祭神は、スサノオノミコト、クシナダヒメノミコトと、オオナムチノミコトと記されている。伝説では、この山に天降ったのはオオナムチノミコトということになっているが、石碑ではスサノオノミコトとクシナダヒメノミコトが天降って、オオナムチノミコトをうんだとされている。伝説の世界では、こうした食い違いも珍しいことではない。



神出神社（鳥居）



霧がかかる頂上

この山に登る人は多い。雌岡山にも雄岡山（おっこさん）にも「毎日登山会」があって、登る人たちはみな顔見知り。お互いに「今日は遅いやないか」などとあいさつを交わしながら行き交う。神社前の広場には、いくつかのベンチが置かれて、人々はそこで、景色を眺めながらひとときを過ごしてゆくのである。

晴れた日、ここからの眺めは素晴らしい。裏六甲の山並みから淡路島、播磨灘（はりまなだ）と、180度の眺望が開けている。西神（せいしん）ニュータウンの近代的な町並みが、雑木林の緑で縁取られ、その手前には、明石川に沿って水田が広がる。そして相方の雄岡山はというと、現在は、木々の間から山頂付近が見えるのみである。



神出神社（石碑）



神出神社（看板）



霧にかすむ本殿



取材で訪れた日は細かな冷たい雨が降っていたので、残念ながら風景は楽しめなかったが、その代わりに、ふもとから立ち上る霧が次々と山頂を覆っては消え、時に社殿を隠すほどに立ちこめ、幻想的なようすを見ることができた。

裸石さんと姫石さん



裸石神社（石碑）

山頂から少し下った場所に、「裸石（らいせき）神社・姫石（ひめいし）神社」の標柱が立っていて、そのわきから階段が、杉木立の中を下る。日中でも薄暗い階段をたどると、間もなく右手に裸石神社がある。本殿の中に祭られているのは、巨大な男性のシンボルである。ひとつは折れた鳥居から作られたそうであり、小さなものを含めて3体を、薄暗い本殿の格子越しに見ることができる。その脇には、やはり石で作られた女性のシンボルも置かれている。



森の中に霧がかかる



裸石神社（境内）



裸石神社（ご神体）

石のシンボルの周囲には、おびただしい数のアワビの貝殻が置かれている。ほとんど堆積していると言いたいほどの量である。この神社に参拝する折には、アワビの貝殻を奉納してゆくということで、その数は、信仰の長さとその間に訪れた参拝者の数を物語っているのだろう。かつては、この山にたくさんのカタクリが自生していて、村の娘たちは春になると、花摘みに行くと言っては裸石神社にお参りしたそうである。

裸石神社から少し離れて姫石神社がある。山腹に露頭した巨大な岩を、女性に見立てたのであろうが、こちらには覆屋もなく、ただ、こけむした岩が太古からの信仰を思わせる。縄文時代に見られる石棒にも、男性の象徴を模したものがあるが、自然の岩を男女に見立てた素朴な信仰は非常に古い起源を持っているから、ここの巨岩もまた、神社という形式ができるよりも古くから信仰されていたのかもしれない。

木立を抜けて車道に戻り、少し下った所には御旅所がある。その一角に、「にい塚」という標柱と、柵に囲まれた塚がある。塚の中心には、大きな石がいくつも崩れたように露出していて、これが横穴式石室をもつ古墳だとわかる。6世紀ごろに造られたものであろう。この地域の里長が、それとも雌岡山にゆかりの深い人物の墓であろうか。



姫石神社（ご神体）



三裂した巨岩

雄岡山

雌岡山の写真を撮り終え、車を走らせて雄岡山へ向かった。雌岡山山頂から雄岡山の麓まで、5分とはかからないが、そこからは雌岡山と違い車で登る道はない。西側の山すそに車を止め、雑木林の中のにびる細い道をたどって山頂へ向かうことになる。雌岡山ほど道は整備されておらず、赤土がむき出しになった滑りやすい道を、息を切らせながら10分ほど登ると、雑木林の向こうに青空が開ける。そこが雄岡山の頂上である。

雄岡山の山頂は、雌岡山に比べてずいぶん狭い。凝灰岩の板石で組んだ小さな稻荷社が立つ山頂からは南側に眺望が開けており、明石大橋まで眺めることができるが、雌岡山の方向はまったく見えない。

この山の南側山腹では水晶が採れるそうで、「子供のころ採りに行った」という話を聞いたことがあるが、今は東西の登山道しかないそうである。



雄岡山（山頂の祠）

国土地理院の地図を開いてみると、雌岡山は249m、雄岡山は241.2mとなっていて、雌岡山の方が7.8m高く山体も大きい。大きくて高い方の山を、「雌」にしたということは、昔の人たちにとっては、女神の方が立派で信頼に足るものだったからだろうか。男の僕としては少々悔しくもあるけれど、確かに古代には、女性は豊饒（ほうじょう）の象徴でもあったし、邪馬台国の卑弥呼の例を引くまでもなく、国を統べ、祭祀（さいし）をつかさどる存在だったし、現代社会でも全然別の意味で、男より女の方が生き生きしている人が多いようだから、ここのところは素直に白旗を掲げるしかない。



雄岡山（山頂の祠）



お稲荷様

印南野と土器作り

雌岡山・雄岡山の周囲は、今でこそ一面に水田が広がっているが、東播磨の広大な台地が水田となったのは、そう古いことではない。「印南野（いなみの）」と呼ばれるこの地域は、『枕草子』にも、

「野は嵯峨野、さらなり。印南野。交野……」

と記されているが、文字通り、開墾の手が届いていない「野」だったのだろう。ここでは何よりも水の確保が大変な作業で、特に江戸時代にはたくさんの溜池が造られたそうであるが、今ではそれに加えて東播用水が広い台地を潤している。

さて、清少納言が『枕草子』を著してから100年ほど後の平安時代末、神出の周辺が一大工業地帯となったことをご存じだろうか。この地で生産されたのは、須恵器（すえき）と呼ばれる土器、そして瓦である。中でも須恵器の鉢は、神出と、少し遅れて明石市（あかし）の魚住付近に営まれた窯で、鎌倉時代にかけて大量に生産され、関東から九州に至る広い範囲に流通していた。「東播系中世須恵器」とも呼ばれる須恵器の鉢は、各地で料理に使われたことだろう。瓦の方は、平安京の寺院からの注文だったようで、京都の鳥羽離宮や、東寺、尊勝寺などの屋根を飾っていたことが、発掘調査で確かめられている。



神出窯跡群の発掘調査



窯の内部



窯の内部



神出窯跡群から出土した須恵器



丘陵のあちこちから、土器を焼く煙が立ち上る夕焼け。かつての雌岡山からは、そんな風景がながめられたことだろう。

本ページ6枚の写真は兵庫県立考古博物館提供

北条時頼と最明寺



最明寺（全景）



最明寺（境内）

雌岡山の南西には、法道仙人が開いたとされる寺院の一つ、雄岡山最明寺がある（雌岡山のふもとなのだが）。最明寺境内にある「北条時頼噛み割りの梅の木」は、鎌倉幕府の執権だった北条時頼が、出家して各地をまわった時、この地に立ち寄って、法道仙人の遺言と法華経を石箱に入れて地中に埋め、その上に自分が噛み割った梅の実の半分を植えたものだといわれている。また最明寺郷土館には、2000点を超える土鈴が展示されているそうである。ボタンやムクゲの花も有名なお寺なので、その季節に、ぜひもう一度訪ねてみたい。



北条時頼かみわりの梅



十三重石塔



宝篋印塔



仏様が並ぶ

蛇足かもしれないが、豊かな森を残す雌岡山・雄岡山には、今もキツネやタヌキがいるようだ。季節ごとに鳥の種類も多い。その美しさから「春の女神」と称えられるギフチョウは、ふもとにある神出学園の生徒たちや、神戸市の神出自然教育園など、多くの人の努力で生き残っている。豊かな里山が、開発によって消えゆく現代、雌岡山・雄岡山の自然が、人々の素朴な信仰とともに未来へ受け継がれることを願わずにはいられない。

古代の信仰、立ち上る土器作りの煙、そして近代的なニュータウンを眺めながら、山造りをした神様たちは何を思っているだろうか。

用語解説

雌岡山・雄岡山（めっこさん・おっこさん）

神戸市西区に所在する山。雌岡山は標高249m、雄岡山は標高241mを測る。古代から神奈備（かなび：神が鎮座する山）として信仰されたようで、雌岡山頂上には、神出神社が祭られている。優美な山容から、一帯は『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』の自然景観でCランクにあげられている。

神出神社（かんでじんじゃ）

神戸市西区神出町の雌岡山山頂に所在する神社。スサノオノミコトと妻のクシナダヒメ、およびオオナムチノミコトを祭神とする。後に、前2神の孫にあたるオオクニヌシノミコトから八百余の神々が生まれたことが、「神出」の由来とされる。雌岡山は牛頭天王を祭っているため、「天王山」（てんのはん）とも呼ばれる。山頂からは、六甲山・淡路島方面から小豆島までを望むことができる。

スサノオノミコト・クシナダヒメノミコト（すさのおのみこと・くしなだひめのみこと）

記紀の神話に登場する神。古事記では建速須佐之男命（たけはやすさのおのみこと）と呼ぶ。イザナギノミコトの3子の末。イザナギから海を統治するよう命ぜられるがそれを拒否する。一時、姉のアマテラスオオミカミが治める高天原に滞在したが、後に出雲国に至り、怪蛇ヤマタノオロチを退治。クシナダヒメと結婚したとされる。出雲神話の祖となる大国主命（おおくにぬしのみこと：『日本書紀』ではオオナムチノミコトとする）は、スサノオの子とも六世あるいは七世孫ともされている。

オオナムチノミコト（おおなむちのみこと）

記紀や風土記に見られる神。国造り、国土経営などの神とされるほか、農業神、商業神、医療神としても信仰される。大穴牟遲神・大己貴命・大穴持命・大汝命など、さまざまに表記される。『播磨国風土記』では、葦原色許乎神（あしはらのしこをのみこと）、伊和大神と同一神とみなされているようである。また記紀では、大国主（おおくにぬし）と同一神として扱われる。こうした神名の多重性は、本来、各地域で伝承された別個の神を、記紀編集などの過程で統一しようとしたため生じたものである。

裸石神社・姫石神社（らいせきじんじゃ・ひめいしじんじゃ）

神戸市西区神出町の雌岡山中腹に所在する神社。縁結び、安産の神として信仰される。裸石神社は、彦石と呼ばれる男性の象徴を祭り、姫石神社は女性を象徴する三裂した巨岩を祭る。現在は裸石神社のみ社殿が設けられているが、本来社殿はなかった。彦石にまたがって体をゆすると願いがかなうという伝承があるといい、巨岩を性の象徴として、子孫繁栄や豊饒を祈る古い信仰の系譜をひくものと思われる。裸石神社には、アワビの貝殻を供えて祈願するという風習があり、彦石の周辺は貝殻で埋まっている。

カタクリ（かたくり）

ユリ科カタクリ属に属する多年草。学名はErythronium japonicum。雑木林の林床に群生し、早春に地上部を展開させて薄紫色の花をつける。夏季には地上部は枯れる。鱗茎（りんけい：球根）から片栗粉がとれる。カタコクリは古名。『万葉集』では堅香子（かたかご）とも呼ばれる。

用語解説

御旅所（おたびしょ）

神社の祭りで、本宮を出た神輿を迎えて仮に奉安する所。仮宮。

にい塚（にいづか）

雌岡山西側の中腹にある古墳。大型石材が露出していることから、横穴式石室が埋葬主体と思われる。調査がおこなわれていないため詳細は不明。

横穴式石室（よこあなしきせきしつ）

古墳に設けられる埋葬施設のひとつ。竪穴式石室と対比される。石材を積んで構築された石室の一方に、外部と結ばれた通路を設けたもので、通常は棺を納める玄室（げんしつ）と、通路にあたる羨道（せんどう）から構成される。

邪馬台国・卑弥呼（やまたいこく・ひみこ）

邪馬台国は、『魏志（ぎし）』の東夷伝倭人の条（一般には魏志倭人伝と呼ばれる）に記載された倭の国の一つで、卑弥呼はその女王。『魏志』によれば、小国が分立して争乱状態にあった倭は、卑弥呼を女王に立てることで安定したという。卑弥呼は数回にわたって魏に遣使し、「親魏倭王（しんぎわのおう）」の称号と金印を与えられた。卑弥呼は3世紀中ごろに没したとされるが、これは古墳時代の初頭にあたる。邪馬台国の所在地は古くから論争的となっており、九州説と大和説が対立していたが、近年、初期の大型古墳が大和地域で発生したことが明らかになり、大和説をとる研究者が多くなっている。

印南野（いなみの）

高砂市、加古川市から明石市にかけての平野および台地。加古川、明石川の流域にあたり、沖積平野は豊かな生産力を誇る。陸海ともに西国への要衝であり、記紀や『播磨国風土記』にも、この地域の経営に関する記録・伝承が多い。

枕草子・清少納言（まくらのそうし・せいしょうなごん）

枕草子は、平安時代に清少納言により著された随筆集で、全3巻。一条天皇の中宮、定子に仕えていた筆者の随筆で、宮中の日常や行事、筆者の自然観、人生観などからなる。豊かな感受性と透徹した文体で、同時期の『源氏物語』と並び、平安時代女流文学の代表作とされる。筆者の清少納言は清原元輔の娘で、本名、生没年とも不詳。

須恵器（すえき）

古墳時代中期に生産が開始された無釉の陶質土器。須恵器の技術は、5世紀代に朝鮮半島からの渡来人によってもたらされ、大阪府南部で生産が開始された。半地下式の登窯（のぼりがま）を用い、1100度前後の還元焰（かんげんえん）で焼成されるため、表面は青灰色を呈する。6世紀以降は、北海道を除く全国で生産されるようになり、平安時代末には陶器へと発展してゆく。

用語解説

東播系中世須恵器（とうばんけいちゅうせいすえき）

兵庫県の東播磨地方で、平安時代末～室町時代初期に生産された須恵器。三木市、神戸市西区、明石市などに窯跡が集中する。大型の甕（かめ）、片口鉢、碗などを生産していたが、特に生産の後半期には、片口鉢を多量に生産するようになった。東播系の須恵器は、全国各地の遺跡から出土し、東播磨地域が当時の一大窯業地帯であったことを示している。またこの地域の窯で焼かれた瓦は、主に平安京内の寺院で使用され、鳥羽離宮、東寺、尊勝寺（そんしょうじ）などから出土している。15世紀には生産を終えた。

鳥羽離宮（とばりきゅう）

白河上皇（1053～1129）が、平安京の南に造営した離宮。

東寺（とうじ）

正式名称は金光明四天王教王護国寺（こんこうみょうしてんのうきょうおうごこくじ）。平安京の左京に設けられた寺院で、823年に空海に与えられて、真言宗の根本道場となった。

尊勝寺（そんしょうじ）

堀河天皇の発願により、平安京内に建てられた寺院（創建は1102年）。法勝寺（ほっしょうじ）、最勝寺（さいしょうじ）、円勝寺（えんしょうじ）、成勝寺（せいしょうじ）、延勝寺（えんしょうじ）とともに六勝寺（ろくしょうじ・りくしょうじ）と称される。

最明寺（さいみょうじ）

神戸市西区神出町に所在する真言宗の寺院。雄岡山（おっこさん）と号する。7世紀に法道仙人が開いたという伝承をもつ。また、鎌倉幕府の5代執権北条時頼（ほうじょうときより：1227～63）が、出家して最明寺入道と名乗り各地をまわった際、この寺に立ち寄って、法道仙人の遺言と法華経を入れた石箱を地中に埋めた後、梅の実を噛み割って、半分をそこに植えたという伝承がある。現在も境内には、何代目かにあたる「時頼かみわりの梅」がある。

法道仙人（ほうどうせんになん）

法華山一乗寺（ほっけさんいちじょうじ）を開いたとされる、伝説上の仙人。他にも数多くの、近畿地方の山岳寺院を開いたとされる。法道仙人についての最も古い記録は、兵庫県加東市にある御嶽山（みたけさん）清水寺に伝わる1181年のものである。

伝説によれば、法道仙人は天竺（てんじく＝インド）の靈鷲山（りょうじゆせん）に住む五百侍明仙の一人で、孝徳天皇のころ、紫雲に乗って日本に渡り、法華山一乗寺を開いたという。千手大悲銅像（千手観音）と仏舎利（ぶっしゃり）、宝鉢を持って常に法華経を誦（よう）し、また、その鉢を里へ飛ばしては供物を受けたので、空鉢仙人とも呼ばれたとされる。室町時代初期に著された『峰相記（みねあいき）』には、播磨において法道仙人が開いた寺として、20か寺があげられている。

用語解説

北条時頼（ほうじょうときより）

鎌倉幕府の第5代執権（1227～63）。幕府に引付衆（ひきつけしゅう）を置いて、裁判の迅速化と公正化をはかるなど幕府政治の改革をおこなったほか、有力豪族であった三浦氏を滅ぼして北条氏独裁体制を確立した。民政にも尽力したとされ、このため、諸国巡回の伝説がある。

ギフチョウ（ぎふちょう）

アゲハチョウ科に属するチョウ。年に一度、4月に現れ、その美しさから「春の女神」と称えられる。播磨地域では、幼虫はミヤコアオイ・ヒメカンアオイなどを食べて育つ。食草の関係から、播磨地域では、里山の雑木林が主な生息地となっていたが、開発による生息地の破壊と、雑木林の放置による荒廃で減少しつつある。環境省絶滅危惧（きぐ）II類、『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』Bランク。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	神戸の伝説散歩(兵庫ふるさと散歩11)	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター
	今はむかし伝説紀行	2004	ビジュアルブックス編集委員会	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化	日本古典文学大系19 枕草子	1958	池田亀鑑・岸上愼二・秋山 虔 校注	岩波書店
	日本古典文学大系67 日本書紀 上	1967	坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注	岩波書店
	兵庫ふるさと散歩2 路傍の神仏たち	1979	神戸新聞社	神戸新聞出版センター
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	新修神戸市史	1989	新修神戸市史編集委員会	神戸市教育委員会
	兵庫県史考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	兵庫県遺跡地図(第1分冊・第2分冊)	2004	兵庫県教育委員会	兵庫県教育委員会
その他	原色日本植物図鑑木本編	1979	北村史郎・村田源	保育社

所在地リスト



最明寺
雌岡山神出神社
裸石神社
姫石神社
雄岡山

最明寺	神戸市西区神出町東828
雌岡山神出神社	神戸市西区神出町東1180
裸石神社	神戸市西区神出町東1180
姫石神社	神戸市西区神出町東1180
雄岡山	神戸市西区神出町東

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日